

下層の調査 (縄文時代中期前葉～中葉)

下層の概要

下層は標高3.5m前後を測ります。過去の調査では竪穴住居や土坑、ゴミ捨て場(以下「廃棄場あるいは盛土遺構」)などが検出されています。

今年度は調査区を縦断し、海側にカーブする廃棄場とそれに平行するかのような石列、竪穴住居やお墓と思われる土坑・埋め甕などを検出しました。

遺跡は縄文人が生活していた地面を、約1mもの洪水堆積層が覆うことにより、非常に良好な状態で残っています。これまであまり類例のない遺構や、膨大な量の遺物があることなどから、慎重に調査を進めています。

遺構・遺物は廃棄場とそのカーブの内側(海側)に多く見られます。一方、廃棄場の外側(山側)は標高が若干低く、遺物のブロックが何か所か確認できる程度です。廃棄場のウチとソトで、縄文人の利用の仕方に違いがあることが分かります。

下層の年代は隣接地の樹根を年代測定(¹⁴C)したところ、今からおよそ4,500年前を示しました。



遺跡近景



廃棄場遺物出土状況 (東から)

遺構

廃棄場/盛土遺構 土器や石器、礫、魚や動物の骨などが大量に出土する範囲です。幅約8mで、東西方向に弧を描くように見つけられました。遺物量や地形・土層の観察から3ブロックに分けました。縄文人が長い年月、食物残渣(食べかす)など様々なものを廃棄した結果、盛土状に堆積しています。厚いか所では50cmを測ります。堆積土は土のう袋に採り、水洗いして、微細な遺物を探します。この土を分析することにより、縄文人の生活がより詳しく解明できると思われれます。また、伏せた状態の甕や配石などの遺構が検出されていることから、祭祀を行っていた可能性があります。



廃棄場の土層堆積状況 (南西から)

列石 東西方向(やや北向き)、約40mにわたって検出しました。西端は海側に折れ曲がります。長さ50cmを超える大型の礫を中心として構成されています。石材は主に早川産の玢岩で、わずかに姫川産の砂岩が見られます。5～8個の礫からなるまとまりが確認できることから、これらが数珠つなぎとなって、直線状に並んでいるものと思われます。列石は廃棄場と居住域の仕切りと見ることもできますが、縄文のマツリに伴う記念物と考えられます。



列石検出状況 (西から)

竪穴住居 竪穴住居は1棟見つかっています。VI層(洪水堆積層)が弧状に並んだ石に沿うように円形に落ち込んでいたことなどにより判断しました。南端は昨年度の調査により欠損しています。住居の平面形は南北に長い楕円形で、一端は昨年の調査区に切られています。掘り込みの深さは25cmです。住居のほぼ中央には一辺26cmの正方形をした石囲炉があります。長さ約15cm、厚さ約5cmの平たい石4個で構成されています。炉の周辺からは炭化物が多量に出土していることから、使用時の痕跡がうかがえます。この炭を科学分析することにより、この住居が使用されていた年代を知ることができます。



竪穴住居遺構検出状況 (北から)

竪穴の周囲には、周堤と呼ばれる土手状の高まりがあります。これは雨水の侵入を防ぐためのもので、竪穴を掘った土などを盛っています。

住居の埋土や床面からはそれほど多くの遺物は出土しませんでした。これは、この集落の最終盤に建てられた住居のため、竪穴のくぼみに物を捨てる人がいなかったことを示唆しています。今後は、弧状に並んだ石と竪穴住居の関係性を検討していく予定です。



石囲炉検出状況

遺物

縄文時代中期前葉～中葉の遺物が出土しています。土器は石川県や富山県を分布の中心とする新崎式、上山田・天神山式土器を中心に、東北系・越後系のものがあります。なかでも火炎土器様式の一つである王冠型土器が見つかった状態で出土したことは特筆できます。この土器は県内で最も西の出土となります。石器は蛇紋岩製の磨製石斧、打製石斧、工具類(磨石・敲石・砥石など)、狩猟具(石鏃)、漁労具(石錘)、当地域で多く見られる貝殻状剥片のほか、ヒスイ原石、黒曜石などがあります。また、魚や動物の焼けた骨、種子などの微細遺物が多く見つかっています。これらを分析することにより、縄文人の生活や周辺環境、遺構の使用季節などが分かるかもしれません。



遺物出土状況



出土した石器



王冠型土器